

○KVBC REPORT

**KVBC人材ネットワークプロジェクト**  
**第6回産学懇話会**

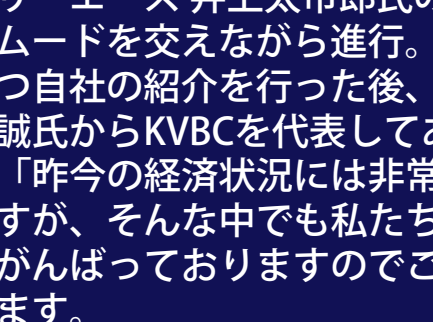
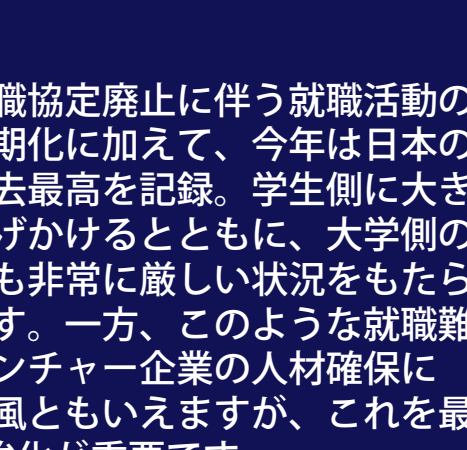
○SAY IT

**KVBC REPORT**

ベンチャーの“人財”確保に向けてスクラム!

**KVBC人材ネットワークプロジェクト**  
**第6回産学懇話会**

2月24日(水)からすま京都ホテルにおいて、会員企業と大学が来年度の新卒求人について話し合うための第6回産学懇話会が開催されました。就職協定の解禁後、学生の就職活動がますます早期化・長期化する中で、採用する企業側はどのように対応していけばいいのか。より優れた“人財”を求めるKVBCメンバー19社と京滋18大学で進路指導にあたっておられる先生方が一堂に会し、互いの活動報告や今後の連携についての意見交換が行われました。

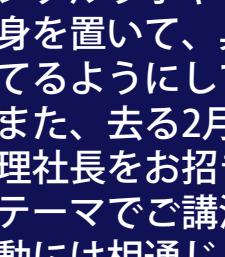


一昨年の就職協定廃止に伴う就職活動の早期化・長期化に加えて、今年は日本の失業率が過去最高を記録。学生側に大きな不安を投げかけるとともに、大学側の進路指導にも非常に厳しい状況をもたらしたようです。一方、このような就職難の状況はベンチャー企業の人材確保にとって追い風ともいえますが、これを最大限に生かすには、大学側との連携の強化が重要です。そんな中、KVBC人材ネットワークプロジェクトでは第6回産学懇話会を開催し、来年度の就職戦線の動きに対応するための企業側と大学側の連携について話し合いが持たれました。当日は、(株)スリーエス 井上太市郎氏の司会により、緊張感の中にも和やかなムードを交えながら進行。名刺交換に続いて、企業側が約1分間ずつ自社の紹介を行った後、副代表幹事である市川甚商事(株)市川誠氏からKVBCを代表してあいさつがありました。



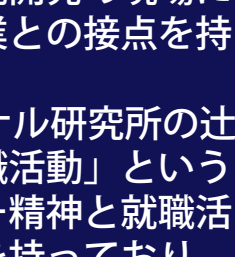
「昨今の経済状況には非常に切迫したものがありませんが、そんな中でも私たちのメンバーは様々な形でがんばっておりますのでご安心いただきたいと思います。」

みなさんとお話を通じて、一人でもいい学生さんを採用させていただき、大きな志を持っていただけるよう努力する。そして、成長してもらうことが私たちの役割だと考えております。本日の懇話会から大きな成果が生まれることを期待しています」



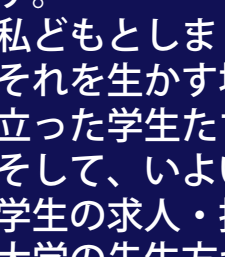
懇話会第1部では、まず人材ネットワークプロジェクト委員長の(株)ユニシス 藤岡清氏より、KVBCの求人活動の全体の流れや昨年度の採用状況などについての報告をいただきました。次に、大学側からは、龍谷大学と京都精華大学の2大学における進路指導状況などについてお話しいただきました。

最初は龍谷大学就職課長の熊谷睦史氏から。「来年度の新卒予定者に対しては、昨年9月末から12月にかけてガイダンスを行い、2月から学内セミナーの開催を始めました。また、学生の95%が何らかの形でインターネットを就職活動に利用するようになっていることから、学内の端末設備の拡充も行いました。」



今日、学生は強い危機感をもって就職活動に臨んでおり、文系学生の採用が職種別採用にシフトしたため、就職に対して具体的な方向性を持つようになっています。そんな中、ベンチャー企業に対する意識もかなり高まっているようで、問い合わせも入ってくるようになりました。本学の理工学部では、REC(龍谷エクステンションセンター)のレンタルラボやインターン先の企業で学生が実際に研究開発の現場に身を置いて、具体的な部分で就職を意識しながら企業との接点を持つようになっています。

また、去る2月4日には(株)サムコインターナショナル研究所の辻理社長をお招きして「ベンチャー精神で切り拓く就職活動」というテーマでご講演いただきました。私どももベンチャー精神と就職活動には相通じるものがあるのではないかという思いを持っており、学生たちにはそれぞれの“独自性”を生かしながら頑張ってもらいたいと考えています」



続いて、京都精華大学就職部長松浦逸郎氏。「本学は人文学部と美術学部からなる文系大学。学生数が比較的少なく、美術学部が9専攻にわかれていることもあって、フェイストゥフェイスでの対話を重視して進路指導にあたっています。従来は春先と夏休み明けに採用のピークがありましたが、ここ数年は6月初旬までにはほぼ終了して、あとはほとんど求人が残らないという状況になってきました。」

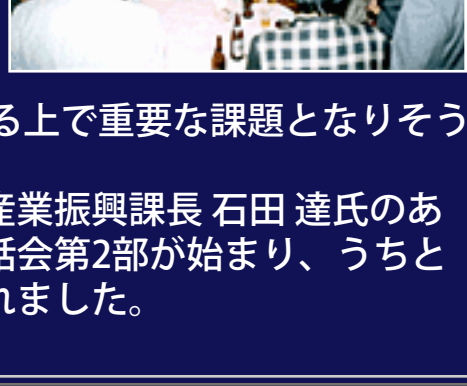
本学の学生は、自分の能力が生かせる仕事やクリエイティブな仕事への志向が強く、ある意味でみなさんのベンチャースピリッツに通じる部分があるといえるかもしれません。また、従来のように、ある大手企業に入れば一生安定した生活ができるという時代ではありませぬので、それぞれの個性に合った場所で自分を生かしながら自己実現を図っていくような人生観を持つことが重要だと考えられます。

私どもとしましては、大学は自己を磨いてつくりあげる場、社会はそれを生かす場であるとして、就職活動というスタートラインに立った学生たちの自己実現を支援したいと思っています。そして、いよいよ大学側と企業側相互の情報・意見交換へと突入。学生の求人・採用に関する企業からの質問が一段落したあとは、各大学の先生方からそれぞれの指導状況のご説明やKVBCの採用活動に対するご意見等をいただきました。

全体的に見て、今年度は6月に採用のピークが過ぎてからも活動を続ける学生が多かったようです。また、私立の総合大学では3回生の夏休み明けから年末にかけてガイダンス、翌年2月から学内セミナーという流れが定着しつつあるようです。採用活動に関する質疑応答については、主な内容を以下にまとめて紹介します。

- 企業** 学生の就職活動の動向と説明会の開催時期についてご意見をお聞かせ下さい。当プロジェクトでは5月11日に就職フェアの開催を予定しているのですが……。
- 龍谷大学** 本学の場合、昨年の3月、4月には学生がセミナーや面接に出かけていてほとんど大学にいませんでしたので、告知期間の不足で周知徹底が図りにくいのではないかとこの不安があります。5月はさらに具体的な動きが開始している頃ですので、合同説明会に学生が参加するのは難しいかもしれません。
- 京都精華大学** 就職活動の全体の流れは大手企業の動きなどから客観的に決まってくるものですから、何ともいえないというのが正直なところ。ただ、5月11日という日程は必ずしも遅いとはいえないのではないかと思います。
- 企業** セミナーにできるだけ多くの学生を集めるためのノウハウをお聞かせ下さい。
- 京都産業大学** 昼過ぎからセミナーを開催しても学生が集まりにくかったため、昨年の6月、7月には午後4時30分から始まるセミナーを実施しました。しかも、私服での参加を許可したので、学生は自由に入出入りすることができたようです。
- 京都学園大学** 合同で学内セミナーに参加していただければ、より強く学生にアピールできるのではないのでしょうか。
- 企業** 会員企業は個々にも採用活動を行っているのですが、セミナーの参加は調整が難しいのではないかと思います。就職資料室でKVBCとしてまとめて紹介いただくことはできないのでしょうか。
- 同志社大学** 京都のベンチャーとしてPRしていくことは非常に有効だと思います。できれば、それぞれの企業の特長や強みがよくわかり、学生に魅力を感じさせるようなもの、また私どもが十分な知識を持って紹介するのに役立つような資料があればありがたいと思います。
- 企業** 5月、6月に内定を出しても、大企業の採用が決定した後には辞退者が出て、秋に再び採用活動を行うという状況が続いています。私たちにとって、採用活動や選考の時期が早いということはないのでしょうか。
- 京都女子大学** 効果的な情報提供という意味では決して早すぎることはない、むしろ学生の研究材料は早めに用意された方がいいのではないのでしょうか。しかし、選考は決して早期でなくてもよいのではないかと思います。

お話しいただいた内容は、いずれも今後のKVBCにおける求人活動を考える上で大きな参考となるもので、ベンチャーに寄せる期待が高まってきたというところもかかってくるようになってきました。一方、大学側からの要望としてあがったのは、企業紹介や採用状況などの情報提供。今後、お互いの連携を密にしながら学生に対するPRを強化する上で重要な課題となりそうです。



引き続き、京都市産業観光局商工部産業振興課長 石田 達氏のあいさつと藤岡委員長の乾杯の音頭で懇話会第2部が始まり、うちとけたムードの中で、話し合いが続けられました。

**参加大学**  
大谷大学・京都外国語大学・京都学園大学・京都教育大学・京都産業大学・京都女子大学・京都精華大学・京都橘女子大学・京都文教大学・光華女子大学・滋賀大学(経済学部)・同志社大学・同志社女子大学・ノートルダム女子大学・花園大学・佛教大学・立命館大学・龍谷大学(50音順)

**特別プロジェクト エココミュニティ研究会**  
**学生起業家がめざす環境・社会貢献ビジネス**

2周年記念拡大京都フォーラムとして開催された前回の研究会を契機に改称した同研究会では、2月24日(水)に第24回目の研究会を開催しました。今回、ゲストとしてお話しいただいたのは、社会にやさしい生活雑貨の販売とデジタル関連事業を手がける(有)ウェイズの畑野裕亮氏。友人の竹田圭一氏と2人で会社を設立し、立命館大学政策科学部の学生起業家としてスタートされたばかりですが、そのビジョンや方向性にはメンバーも感銘を受けるところが大きかったようです。

同社では、資源の有効利用と地元産業の育成を図ることを目的に、インドネシア・バリ島の熱帯雨林の廃材を利用してスプーンやフォークなどを販売。環境保護の熱意も含めた価格で途上国の産品を仕入れた商品も取り扱っています。また、環境や福祉、街づくりなどに関する調査研究やインターネットのホームページ作成も請け負っているそうです。2人が起業を必要とした理由は、環境問題の解決には環境保護と経済システムの連動が必要であり、ボランティアのような自己犠牲の伴う活動には限界があると認識したこと。そして、環境に対する配慮を利潤に結び付け、これを福祉や文化の方面に還元することによって、環境保護のための活動をさらに促進できるような社会システムを目指しているとのこと。 (URL <http://www.ways.co.jp>)

経営の実務や戦略の面についてはまだまだ勉強中ですという、この若き起業家に対し、KVBCメンバーからは先輩としてのアドバイスや励ましの言葉が贈られましたが、その理想の高さや行動力にはやはり感服した様子。また、エコビジネスを社会に定着させていく上で重要な示唆を得るとともに、それぞれの原点を改めて見つめ直す機会ともなったようです。

エココミュニティ研究会では、エコビジネスをコミュニティに根づいたものにするため、研究と情報交換の場として、みなさんの参加をお待ちしています。今年からは理想と、事業の創造を意識して活動を進めてまいります。

**SAY IT**

新たな価値観に応える技術を  
(株)フジヤマ技研 青山雄二氏

適応性のある技術と製品を追求するベンチャー企業として研究・開発に打ち込んできた中で、現在ほど製造業にとって厳しい時代はないと感じております。それは、日本全体を取り巻く不況ムードのせいだけでなく、ユーザーの求めるものが多様化し、変化の速度が急激に早まっていることにも大きな要因があるように思われます。日本企業が現在でも世界有数の技術力を持っていることは間違いないでしょう。しかし、海外では高度な技術や品質よりもむしろ低コストが要求される場合も多く、結果として製品が受け入れられないということにもなりかねません。相手がどこに価値をおいているかを見極めなければ、市場を広げていくことは不可能だといえます。ましてや今は、価値観の大変革の時代。環境や福祉といった社会的な問題がこれまで以上に重視されるようになり、従来のような弱者に対する保護や援助といった姿勢では対応しきれなくなるでしょう。感情的な動機や建前に基づいた一時的なものではなく、問題の本質を見定めて、その根本的な解決を可能にするような方法を考えていく必要があるのではないかと思います。様々な方から指摘されているように、日本の社会システムそのものにも旧来からの矛盾が依然として残っており、高齢化社会に向けた負担の増加など、国民一人ひとりの生活にも将来への不安要素が垣間見られます。にもかかわらず、これを本気で変えようという声があまらず聞かれないのは、不況下でありながらも日本の社会がまだまだ裕福さを保っているからでしょうか。いずれにしても、ビジネスの世界に大きな変革が起ころうとしていることはまず間違いありません。護送船団方式に代表される日本型の産業構造は限界ともいえるところまで来ており、新しい価値観に対応できる企業の創出が強く求められています。その中で社会やユーザーの要求に応える技術や製品を創造していくことが、われわれベンチャーの役目ではないかと感じています。